

農薬研究の現場から



農薬研究施設紹介(13)

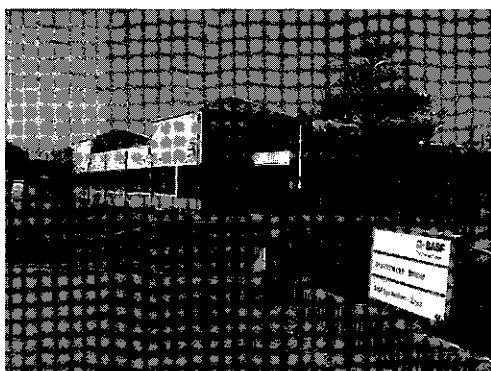
BASF アグロ株式会社 田原研究所

こ とう おさむ
古 藤 修

所在地：愛知県田原市六連町神ヶ谷 16-1

Message from Our Research Sites. BASF Agro Research -
Tahara, BASF Agro, Ltd. By Osamu Koro

(キーワード：農薬研究，農薬開発)



田原研究所

はじめに

BASFはThe Chemical Companyで、化学品、プラスチック、高性能製品、農業・栄養関連製品から原油、天然ガスに至る製品群を持つ。BASF アグロ(株)は、BASF ジャパン(株)の100%子会社で、農耕地・環境衛生における幅広い分野において、農薬の研究・開発・製造・販売・マーケティングまでの一貫した体制を確立している。田原研究所はドイツの中央研究所と連携して日本ならびにアジア・パシフィック向けの新規農薬や製剤開発、生産支援、顧客サービスを実施している。農園芸用、非農耕地やゴルフ場用、家庭防疫薬などの領域をカバーする。

I 研究所の所在地

愛知県の南端で伊勢湾に突き出した渥美半島では、田原町、赤羽根町、渥美町の合併で昨年田原市が生まれた。

田原研究所は田原市六連町にある。風光明媚な観光名所、トヨタを中心とする工業地域であると共に、合併により日本一の農産物生産出荷高を誇る農業王国になった。温暖な気候に恵まれた上に、半島全域を灌漑用水が網の目に施設されており、四季を通じて農産物が生産・出荷できるため、年間の単位面積当たりの売り上げは群を抜いて高い。田原研究所のすぐ近くには、700年以上の歴史を誇る神仏同居の名門の長仙寺がある。

II 研究所の歴史

田原研究所は、アメリカンサイアナミッド社の農業研究所として1980年5月に旧田原町緑ヶ浜に、グル

ープの一員であった日本レダリー(株)の工場跡地(3ha)を改造して設立された。以後1995年9月までの15年間活発な研究開発により、数々の新製品が世に送り出された。他方、1989年に塩害のない場所への研究所移転が決定され、隣接した中部カーボン(株)へ土地および建物設備一式が売却されると共に全国の候補地から田原町六連の土地が最終選抜された。1990年開発行為許可を得た後に、1991年から用地の購入を始め、1994年12月に着工し1995年9月に完工した。計画から6年の歳月を経て、新研究所は10月1日にオープンした。研究員の拡充と共に活発な研究開発を行い、毎年複数の新製品を上市し続けて今日に至る。

しかしながら、この間の道は平坦ではなく、アメリカンサイアナミッド社は1994年7月にアメリカンホームプロダクト社による株式市場でのTOBにより、その傘下となった。2000年7月1日にサイアナミッド部門の売却によりドイツBASF社の所属となった。

III 主要な業績

新規化合物の合成とスクリーニングは、ドイツと米国にある中央研究所にて実施されている。スクリーニングの結果、日本に適した有望な薬剤の生物試験、製剤開発、環境科学(含残留試験)が田原研究所の任務となる。

生物試験と環境科学は、すべての新規登録薬剤の日本での作物、病害虫、薬量、使用時期、回数、混用などを決める極めて重要な役割を果たしてきた。

製剤開発は、日本やアジア・パシフィックの顧客ニーズに適合する製剤の開発を担い、水稲用の製剤開発の役割を負う。開発された主な農業用製品としては、ゴーゴーサン細粒剤F、ネビロス1キロ粒剤、ネビロ